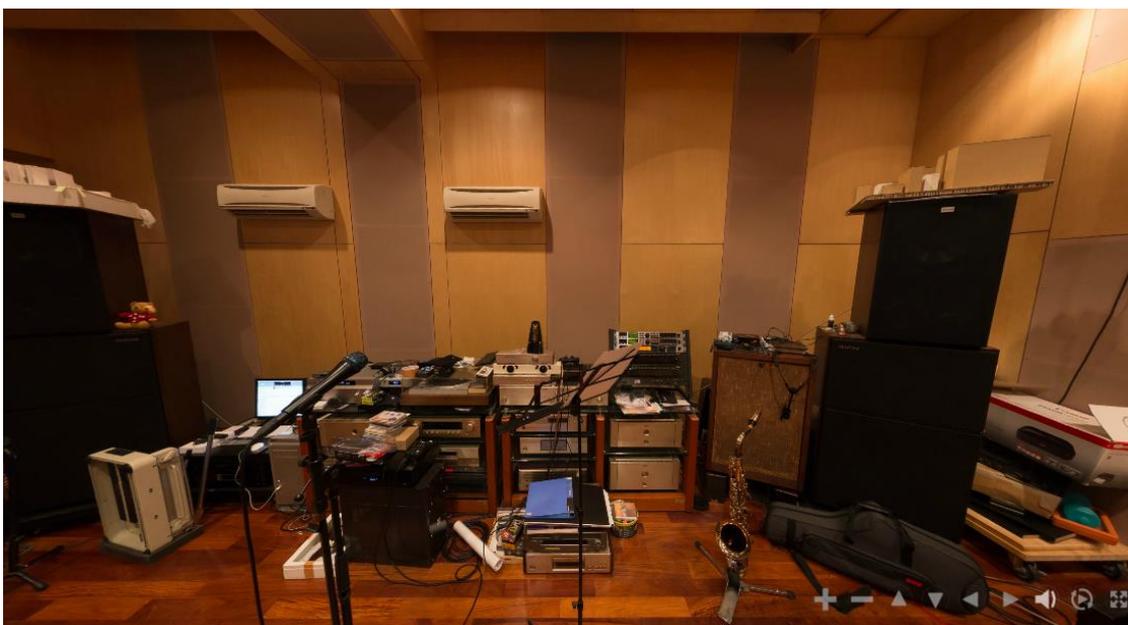


連載 第27回『試聴室探訪記』
～谷口とものり、魅惑のパノラマ写真の世界～
佐野邸“夢のコックピット”訪問
フォトグラファー 谷口 とものり・編集委員 森 芳久



今回は瀟洒な住宅街の一角に佇むお洒落な佐野邸にお邪魔いたしました。

玄関を入り、案内されるまま螺旋階段を降り、地下室に設えられたリスニングルームの分厚い防音ドアを開けると、そこには不思議な世界が広がっていました。使用中のメイン・オーディオ機器はもちろん、サブの機器、只今休止中と思われる機器までが、まさにそれぞれ自分の居場所を主張するかのように並んでいます。オーディオ機器以外の彫刻作品や数多くの品々も、まるでそこを住処としているかのように自己を主張しながら融け合っているようです。お世辞にも整理整頓されているお部屋であるとは言えませんが（失礼）、これが不思議に訪問者をリラックスさせてくれるのです。ドアを閉めると、外部からの騒音も完全にシャットアウトされ、たちまち静寂に包まれます。デッド過ぎず適度な反響を持つこの部屋の居心地は、むしろリスニングルームというよりリビングルームに近いものと言えるでしょう。

佐野氏とはこの日が初対面である種の緊張がありました。この部屋では私もすっかり緊張がほぐれ、音楽にオーディオ談義に没頭できました。

まずはハイレゾでダウンロードされたアルバム「カンタータドミノ」のオー・ホーリー・ナイトを聴きました。パイプオルガンの序奏が始まった途端、この部屋は北欧の教会に変身してしまいました。そしてあのソプラノの声も美しく響きます。見事な臨場感です。

その秘密は佐野氏のお話で理解できました。この部屋の設計は本誌でもおなじみの石井伸一郎氏によるものだったのです。およそ6m×7.5mの床面積に高さ3.5mという地下室としては贅沢な空間を石井マジックによる入念な調音が施されているのです。またこの部屋では、長幅方向にメインスピーカーをセットされていますがこれも音の広がりには良い効果をもたらしています。メイン装置のスピーカーはダイヤトーンDS-5000とDS-505をタンデム縦置きに組み合わせるという面白い構成となっていますが、佐野氏は昔からダイヤトーンの音に惚れ込み、DS-305を始め、いろいろ試されこの組み合わせに行き着いたとのこと。駆動するパワーアンプはソニーRシリーズ、モノラルアンプTA-NR10を2台。プリアンプは同じくRシリーズTA-ER1。プログラムソースはMac ProをNASにコンバーターがAyre QB-9となっています。

オスカー・ピーターソンのピアノソロの再現もなかなかでしたが、やはりここでの音はヴォーカルが光っていました。それもそのはず、実は佐野氏はジャズを歌われまたサックスも手がけられているとのことでした。ジャズとヴォーカルにその思い入れが半端でないことがこの音で分かります。事実この部屋で自らの声やサックス演奏を録音されて楽しまれていると伺いました。

佐野氏はこの部屋を「夢のcockピット」と名付けられています。まさに自分の思いの音を演奏し再生するこの空間は、自分がパイロットとして自在に操れる理想のcockピットなのでしょう。しかし、氏はこの部屋を自分だけの隠れ家とするのではなく、家族が集う、また家族の全員が自由に楽しめる多目的ルームとして位置づけられています。ここに並ぶいろいろな品々は家族の皆様作品なのです。この映像に建築模型や素晴らしい彫刻、絵画などが写っていますので読者の皆様はオーディオ機器以上に素晴らしい宝物を是非見つけてください。谷口ともりさんの映像がこの部屋の温かい雰囲気を見事に伝えてくれていますので皆様も是非ご家族とご一緒にご覧いただければ幸いです。

蛇足ながら、バックに流れている曲はリヒアルト・シュトラウスの「家庭交響曲」の4楽章冒頭です。

この部屋の音響技術的なことに関しては、石井伸一郎さんにもコメントをいただきましたので、そちらも併せてお読みください。

パノラマ画像の操作説明

- パノラマ写真は、[ここ](#)か、はじめのページの**画像**をクリックしてご覧ください。

(ローディングに若干時間がかかる場合があります。)

- マウス操作で、画面を上下・左右360度、自在に回転してご覧いただけます。

- 画面下にある操作ボタンで次の操作ができます。

+ 画面のズームイン

- 画面のズームアウト

← 画面の左移動

→ 画面の右移動

↑ 画面の上方向への移動

↓ 画面の下方向への移動